

---

# 無能な英雄

しろ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無能な英雄

### 【Nコード】

N3528BA

### 【作者名】

しろ

### 【あらすじ】

異世界召喚モノです。

主人公は英雄として異世界に召喚されますが、英雄が本来持っているはずの強さを持ちません。突然の異世界、故郷との別れ。周囲の期待や失望。人間と異種族が戦争を行う世界で、主人公はどのようにあがいてゆくのか。

## プロローグ

剣戟の響き。馬のいななき。戦士たちの咆哮。 戦場の音。

戦場はまるでおもちゃ箱の様で、おもちゃの兵隊たちはにぎやかに駆け回る。

子どもたちは緊張した面持ちで、しかし楽しげに此方をうかがっているに違いない。

自分のお気に入りの活躍が、気になってしょうがないのだ。

そんな取り留めのない連想に思いを寄せつつ、私は大空を飛んでいた。

ワルキューレの象徴たる翼は力強く空を打つ。

それとは対照的に、私の指先は心もとなく震えていた。空気の冷たさと眼前の戦場を感じて。

「グリフィルド様」

私の横を飛んでいた部下が声をかけてくる。私が彼女の上官だからであろう、

それ以上何も言おうとしないが、眼が「大丈夫ですか？」と問いかけていた。

私が軽くうなずきを返すと彼女は少し安心したのか、わずかばかりの笑みを見せ、

一度大きく羽ばたいた。どうやら、先行してくれるようだ。

わずかに先行している彼女の後姿を見つめる。青と銀を基調とした戦装束、銀色に輝く槍、純白の羽根。静謐さと力強さが共存して見える。神々しいとさえ思えた。

自分も同じ格好をしているはずだが、彼女のような立派に見えるだろうか。私は彼女の様になれただろうか。美しく、気高い、

ワルキューレに。

不意に、爆音が響いた。私は体をたて、空気の抵抗を用いて減速すると、爆音が響いた方向をむいた。眼球に魔力を込めると視力は格段に上がり、

地上の様子がはっきりと見て取れた。異音の原因を探る。いや、原因など分かりきっている。

「いました。『災厄の魔人』です」

爆音の原因は敵、人間たちの英雄だった。今代の英雄は歴代の英雄の中でも最強と目され、戦場で恐れられている存在である。

「妖精たちが「すべてを滅ぼす」と予言した男か・・・」

私のつぶやきに彼女が応じる。

「気まぐれな妖精たちの言うことなんか当てになりません。それより、」

「分かっている。いくぞ。」

私は彼女の言葉を遮ると、腰から下げていた槍を手に取り、地上へ向けて滑空した。

地上では虐殺が行われようとしていた。

勇猛なオークやミノタウロスが襲いかかるも、英雄が手をかざすだけで爆発が起こり、そのたくましい体は炎に吞まれていった。

妖精たちが弓を射かけるも、哀れな戦士たち同様、矢はただただ灰となるばかり。英雄の背中には白銀の大剣が吊り下げられているが、誰も、その剣を抜かせることすらできずにいた。

ふと、英雄のいる場所に影が落ちた。きんつ。

英雄の背後、しかも上空からの一撃を英雄は完璧にいなして見せた。そこから、英雄とワルキューレのブレイド・アーツが始まる

英雄と激しく切り結びながら、私の内心は苦々しさでいっぱいだった。影で悟られるとは、戦場に出たての新米（お嬢さん）じゃあるまいし。。。

奇襲自体は成功といって良い。接近戦に持ち込めたためだ。この距離でなら英雄もその不可思議な術を使うことができない。爆発を起こせば自分も巻き込まれるためだ。

しかし、やはり最初の一撃で終えたかった。そう思わせるほどに、英雄の剣の腕は凄まじかった。ウルキユール二人がかりの猛攻を防ぎきっている。

しかも、時折オークやミノタウロスも斬りかかっているというのに、それでも、だ。

英雄は徐々に防御に回るようになってきている。さつきから攻勢に出られていない。

さしもの英雄も、戦場の猛者たちに接近戦で戦うのには限界がある。特に、ウルキユールはその羽根を活かし、上へ下へと動きまわるのだ。

「自分の身もわきまえない愚か者。貴様など仲間を守られて、後方からこそこそと妖しい術でも唱えていれば良かったものを」

私がそう叫んだ瞬間、なぜか英雄の貌が苦悶に歪んだ。そして、それは機敏に飛び回るウルキユールにとって、大きすぎる隙だった。

倒れた英雄に、いや、英雄だった男のもとへ歩み寄る。普段なら倒した敵になど関心を向けない。

ウルキユールの青い眼は常に次に討つ敵の姿を映していなければならぬから。

しかし、今回はなぜか英雄だった男の顔を見ておかなければならない。そんな気がしたのである。

「さようなら。英雄であった男よ。戦場での死は戦士の誉れ。私がおなたに与えた、栄誉ある死を誇りに思うが良い」

玩具は壊れた。きつと、その持ち主は新たなる玩具を求めるのだらう

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3528ba/>

---

無能な英雄

2012年1月9日02時49分発行